

16 レオナルドの描いた二枚の視覚誘導実験絵画

－《岩窟の聖母》 ロンドン版と《最後の晚餐》－

2019

真鍋友範

私たちは、レオナルドが《遠近法》を応用した《最後の晚餐》が優れた【視覚誘導の絵画】であることを知っている。

驚くことに、この作品には兄弟関係にある、関連性の深いもう一枚の視覚誘導実験絵画が存在していた。それは、ロンドン版《岩窟の聖母》なのだ。

~~~~~

この二枚の作品の関連性解明への発端となる位置づけの一枚の絵画が存在する。それはレオナルドが聖堂との契約を破り、完成させることなくフィレンツェに放置された作品だ。



《マギの礼拝》レオナルド・ダ・ヴィンチ 1481

ウフィツィー美術館 フィレンツェ

この作品の構図に注目したい。レオナルドがその後の《聖アンナと母子像》でしばしば用いた【三角構図】がこの作品の前景で用いられている。

一方の遠景には、【遠近法】で描かれた建物があるが、前景とはまったく繋がらない、不秩序な情景が描かれている。その結果、描かれた人々が雑然と散らばって存在する【構図上の失敗作】となっている。

当時のレオナルドには、【構図】への研究課題が存在していた。

恐らく、レオナルドはその失敗理由が判然としないままに制作の存続を放棄し、1482年には希望の地ミラノに発ったのだった。

レオナルドは、絵画でも工学でもすべて興味をもった分野の謎を解く為に、実験し研究する人物であった。従って、この構図上の失敗からの克服方法を考えていたに違いないのだ。

ミラノに移住後に、レオナルドは自身の工房を開く。既に画家であったプレデイス兄弟やフランチェスコ・ナポリターノなどの弟子がいた。

1483年には《聖母無原罪御宿り信心会》から祭壇の中央パネルと周辺の装飾パネルを注文される。契約はレオナルド個人ではなく、プレデイス兄弟と三名の連名での契約であった。

中央パネルはレオナルドが担当し、その部分は旧約聖書外伝から選出したテーマであったという。

ところで、レオナルドは、《聖母無原罪御宿り信心会》が望む祭壇画の場面を、新約聖書ではなく、旧約聖書の中のものでもなく、旧約聖書外典からのテーマを何故選んだのだろうか。

明確ではないのだが、あえて類推するなら、《聖母無原罪御宿り信心会》の望む祭壇画は、当然聖母の無原罪でのイエスの宿しを信じる団体であったからには、主役はあくまで聖母その人であったと思われるのだが、その内容を伝える【根拠となる聖書の場面】が新約聖書では見つからず、ようやくたどり着いたのが旧約聖書外典に記載された場面だったのであろう。

重要なのは、レオナルドは決して【新約聖書の場面を描いていない】という事実だ。

つまりこの事実を前提に考えるなら、最初に描かれたのは、幼児イエスと幼児の《洗礼者ヨゼフ》の登場するルーブル版《岩窟の聖母》ではなく。ロンドン版《岩窟の聖母》が、レオナルドによって描かれた最初の作品なのだ。

《洗礼者ヨゼフ》は新約聖書の《キリストの洗礼》場面で登場する人物だ。

また、同時期の《最後の晚餐》1495-98では【光輪】が描かれておらず、同じく最初の《岩窟の聖母》でも光輪は描かれていなかったと推測できる。当

時の批判項目の一つであった【聖人の風格が無い】という批判は、《ロンドン版》に【光輪】という図像を描かなかったことへの信心会側の不満であったのだ。

でも、【画面が暗い】とか、【イエスが何処に居るか判らない】といった信心会からの批判があるにもかかわらず、レオナルドはどのようにして描き直さなかったのか。

プライドの為であったところで、依頼作品を完成させなければ、残りの画料が支払われず、共同契約者のプレディス兄弟が最も困るのだ。

それでもレオナルドは描き直しには応じず、相手方の信心会も受け取りを拒否したので、最初の裁判が1490-95年にかけての時期に、当時のミラノ公ルドヴィコ・スフォルツァ（イル・モーロ）に対して裁判が申し立てられたのだった。

しかし、1499年にフランス軍ルイ12世のミラノ侵略により、レオナルドは作品を残し、ミラノを離れた。

イル・モーロは1500年に失脚したが、侵略の危機にあったイル・モーロには、この問題解決の余裕は無かったのだった。

この騒動と平行して、少し時代が遡るが、この裁判問題が解決しないまま、レオナルドにはミラノのサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ聖堂の食堂画《最後の晩餐》1495-98が依頼され作品は完成していた。

ほぼ同時代に一方は係争に巻き込まれ、もう一方の作品は無事完成していたのだ。

~~~~~

さて、以上の背景のもと、この2作品は、レオナルドのフィレンツェ時代の失敗作《マギの礼拝》での失敗から脱却し、【新しい段階での作品に到達したことを示す、密かな実験絵画であったこと】を、両作品の《構図》に着目しながら解説したい。

ロンドン版《岩窟の聖母》

ロンドン版《岩窟の聖母》に対して、【画面が暗い】という信心会の批判とは、岩窟内への彩光と影のコントラストから生じる【明暗法】効果の強い描写を指していると思われる。

一方でルーブル版《岩窟の聖母》は一般的かつ平凡なルネサンス期の広く分散した光による描写画面だ。

つまり、ロンドン版《岩窟の聖母》の方が、バロックに近い新鮮な表現だったのだが、信心会には、上記の如く不評であったのだ。

フィレンツェでの【構図上の失敗を】ひきずりながら、構図問題解決の必要があったレオナルドは、《聖母無原罪御宿り信心会》からの作品注文時にも、その解決方法を模索したに違いない。

では、具体的に《岩窟の聖母ロンドン版》の構図を検討したい。



《岩窟の聖母》ロンドン版 1483-90

レオナルドがルーブル版より先に描いた作品

(原作から二度にわたり加筆修正されている)¹

ナショナル・ミュージアム ロンドン

《頭部中心軸線と視線》による視線誘導実験絵画

¹ 詳しくは《岩窟の聖母》-秘められた謎と新制作順仮説-2017 参照

* オレンジの線は頭部中心軸線

* イエローの線は視線（天使は脇役なのでその視線を無視する）

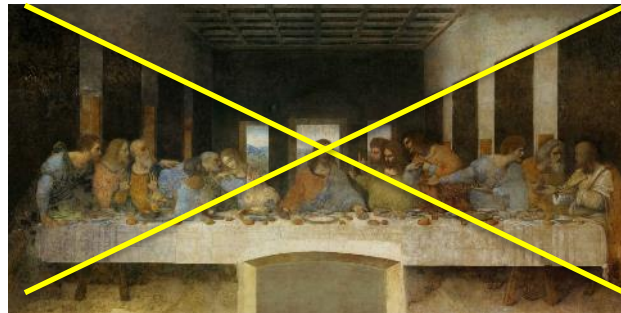
このオレンジの線は、聖母頭部の中心軸と、右側の天使の頭部の中心軸だが、その双方の中心軸は、引き延ばすと、幼児イエスの頭部で交わる。

一方で、イエローの線は、聖母から幼児イエスに注がれる視線と、幼児の預言者からの視線であり、双方とも幼児イエスに注がれている。

これらを合成すると上記のように、視線が幼児イエスに注がれるよう導かれる構図であることが判る。

自然界を背景とする場面であるが、見事に観者の視線誘導を行っている。

《最後の晩餐》



《最後の晩餐》 1495-98

サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ聖堂 ミラノ

《遠近法》による視線誘導実験絵画

《最後の晩餐》は、建物の中における視線誘導を行うのに、《遠近法》を利用した実験絵画なのだ。

まとめよう。これら2作品の共通点は何か。

それは《岩窟の聖母ロンドン版》が、《頭部中心軸線と視線》による《自然空間における視線誘導実験》であり、《最後の晚餐》が、《遠近法》による《室内空間における視線誘導実験》という関係にある点だ。

レオナルドが信心会からの描き直し要求に応じなかった真の理由は、ここにあったと推測されるのだ。